

高等学校における古典教育の展開と集積

― 単元編成と指導法の開拓をめざして ―

世 羅 博 昭

はじめに

昭和三八年四月から昭和五四年三月まで、広島県立高校一六年間と広島大学附属中・高校五年間、あわせて二二年間、私は高校国語科教師として国語科教育、中でも古典教育の実践に全力で取り組んできた。このたびは、二二年間、どのような古典の教材化と単元編成を図って、どのような指導を展開してきたか、その実践個体史を「跡づける」とともに、その過程で、私がどのような古典教育の領野を切り拓いていったか、その内実を明らかにしたい。

一、私の古典教育実践個体史の時期区分

私の古典教育実践史は、呉三津田高校時代を二つに分けて、次の表のように、大きく五期に分けて整理できる。

以下、この五期に分けて、それぞれの時代や学校状況のもと、ど

第一期（模索期）	22歳～25歳（四年間）
三次高校時代（昭和三八年度～四一年度）	
第二期（試行期）	26歳～30歳（五年間）
呉三津田高校時代前期（昭和四二年度～四六年度）	
第三期（展開期）	31歳～34歳（四年間）
呉三津田高校時代後期（昭和四七年度～五〇年度）	
第四期（発展期）	35歳～37歳（三年間）
安古市高校時代（昭和五一年度～五三年度）	
第五期（深化期）	38歳～42歳（五年間）
広島大学附属中・高校時代（昭和五四年度～五九年度）	

のような古典教育を展開していったか、実践個体史を跡づけるとともに、私自身がどのような古典教育の領野を開拓していったかを明らかにしていきたい。

二、第一期（模索期）の古典教育実践の展開

高校国語科教師になるにあたって、私は、「源氏物語」を生徒に普及させることと「立体的な古典教育」の実現を自らの実践目標に掲げた。〈原文の音読↓語句の意味・文法的説明↓口語訳〉に終始する訓詁注積的な古典指導を乗りこえ、時代状況や風俗習慣なども押さえて、ことばの背後に人間の見える古典文学教育を実践したいと考えていたのである。しかし、この実践目標の達成はなかなか容易なことではなかった。

昭和三八年四月、東北の進学校三次高校に赴任。この期は、金田弘・石井秀夫著『古文単語の整理法』学研、昭和37年3月）や小西甚一著『基本古語辞典』大修館・昭和41年3月）に出会ったことが刺激となって、古語単語力を育てるために、語源や「基本的な意味」に着目して意味の派生を考える指導に力を注ぐ。昭和四〇年度からは、私の提案で、前掲『古文単語の整理法』を普通科全生徒に購入させて、全校一斉古語単語テスト（クラス対抗）を始めた。

また、古典解釈力を育てるために、『時代別・作品別 解釈文法』（至文堂、昭和30年7月）を参考にした敬語法と助動詞の指導や、時枝誠記著『日本文法 口語法』（岩波書店、昭和20年9月）所収の「文の入子型構造」を援用した「源氏物語の図式法」を試みる。

この第一期の四年間は、訓詁注積的な古典授業から抜け出せず、古典読解力を育てるために古語単語や古典文法の指導をあれこれと模索した時期であった。

三、第二期（試行期）の古典教育実践の展開

昭和四二年四月、県南の進学校・呉三津田高校に転勤。進路指導部に所属しながらも、あまりに過度の受験体制に疑問を持つ。担任の生徒の中に自律神経失調症や学力不振、不登校の生徒を抱え、家庭訪問などを繰り返す。「大学への受験指導」を超えた古典指導のあり方を模索して、古典の授業でも「課題学習」の試みを始める。先輩の先生の実践に刺激されて取り組み始めたものである。

昭和四三年九月、「A君退学事件」が提起された。広島県高等学校同和教育推進協議会等から、過度の受験教育が厳しく問いただされる。受験教育のどこに問題があり、今後どのように改善すべきか、深夜に及ぶ職員会議を何度も開いて検討を重ねた結果、二期期の途中ではあったが、大学受験体制を見直し、早朝補習、七時間授業、能力別授業クラス編成、特別補習等の廃止を決定し、教育の正常化を図っていった。この過程で、教育とは何か、同和教育とは何か、生徒の進路保障とは何か、生徒一人ひとりを大切にするとはいかほど、教育の根本を深く考えさせられた。

昭和四三年度頃から、「高校紛争」が起きる。生徒たちは、学校や教師一人ひとりに対して、「教育とは何か」「学校とは何か」「教師とは何か」「国語教育とは何か」「古典教育の必要性は何か」などと、私たち教師の立っている根本を厳しく問いただしてきた。これ

らの問題提起は、受験体制の中で喘いでいた生徒たちの心の底からの叫びでもあった。授業の中で、あるいは、授業以外のさまざまな場で、生徒たちと何度も何度も話し合った。

昭和四三年度は、「教育の本質」を否応なく考えさせられる一年であった。その後、私は、生徒たちが提起した問題を真正面から受けとめて、その問題の解決を図る実践を少しずつ取り組み始める。

古典教育実践では、語句の意味用法や文法を押さえることが内容を読み味わうことに機能する指導の必要性を感じて、さまざまな試み始めるようになる。

昭和四三年七月末には、一年生を対象に、夏休みの課題として、「説話文学を読む―混沌とした時代の中を生きるさまざまな人間の生き方を探る―」という題のプリント（B4西洋紙7枚）を配布した。没落貴族である藤原元方及びその子孫の生き方に焦点を当てながら、ほかに、武士や僧、児の生き方も取り上げて、平安時代末期の混沌とした状況の中を、それぞれの人物がどのような生きているかを読みとらせる教材化と単元編成を図った。

課題プリントは、それぞれ、傍注を施した本文、問題A（解釈に関する問題）、問題B（内容把握に関する問題）、解説からなる。課題プリントの構成は、下段の表のようになっている。

平安時代末期の混沌とした時代状況の中を生きる、さまざまな人間の生き方を読みとることを通して、「高校紛争」など現代の混沌

I	没落貴族の生き方（↓私の発掘した教材） (1) 藤原元方の失意と子孫の生き方（解説と系図） (2) 新しい英雄・藤原保昌（元方の孫）の生き方 ○ 藤原保昌朝臣、値盗人袴垂語（今昔物語、巻二五・第七話） ○ 藤原保昌についての解説 ○ 受領・藤原陳忠（元方の子）の生き方 (3) 信濃守藤原陳忠、落入御坂語（今昔物語、巻二八・第三八話） ○ 藤原陳忠についての解説 (4) 大盗人・藤原保輔（元方の孫）の生き方 ○ 保輔盗人たる事（宇治拾遺物語、巻一一ノ二） ○ 袴垂、於関山虚死殺人語（今昔物語、巻二九・第一九話） ○ 藤原保輔についての解説 (5) 藤原元方の子孫の生き方（まとめ） (6) 武士の生き方（↓高校一年用教科書教材） (7) 源頼信の生き方 ○ 藤原親孝為盗人被捕質依頼頼信言免語（今昔物語、巻二五・第一一話） ○ 源頼信についての解説 (8) 僧の生き方（↓高校一年用教科書教材） (9) 横川の源信僧都の生き方 ○ 横川源信僧都語（今昔物語、巻一五・第三九話） ○ 参考）多武峰の増賀聖人：三条大皇太后宮出家語（今昔物語、巻九・第一八話）の簡単な紹介 IV 児の生き方（↓高校一年用教科書教材） (10) 児の搔餅するに空寝したる事（宇治拾遺物語、巻一ノ二二） (11) 田舎の児、桜の散るを見て泣く事（宇治拾遺物語、巻一ノ二三） ○ 二人の児についての解説
---	---

とした時代状況の中を生きている高校生にとって、その古典を読むことがどのような意味を持つかを考えさせようとする、私の思いが、

このような古典教材化を思い浮かせたものである。

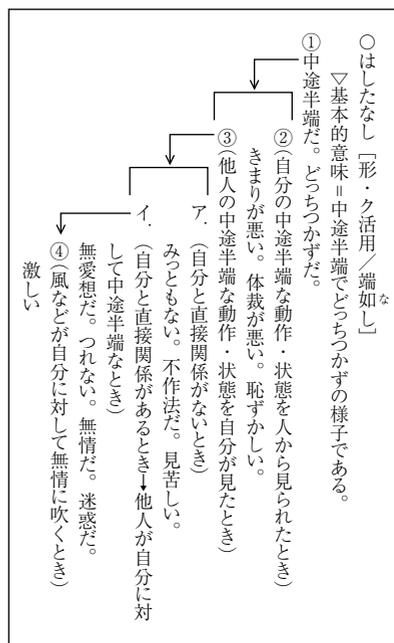
この教材化を通して、私は古典の教材化と単元編成の楽しさや面白さを体験した。この体験が、その後、国語科授業の中で、意欲的に古典の教材化と単元編成を図る大きなきっかけとなった。私にとって、記念すべき実践である。

この実践報告は、『野地潤家先生傘寿記念論集』（大阪国語教育研究会編、平成12年11月）に掲載されている。なお、「I 没落貴族の生き方」の教材化は、中央公論社『日本の歴史 5 王朝の貴族』（土田直鎮著・昭和40年6月）所収の「元方の怨念」を参考にしているものである。

昭和四三年七月末には、三年生の夏季補習ではあるが、「源氏物語」の「夕顔」の巻を取り上げて、「古典における語句・語彙の指導」・「形容詞・形容動詞を中心に」の実践を行った。

「ことばはもとひとつの意味で用いられたが、さまざまな人が、さまざまな場面で用いているうちに、意味がさまざまに派生していったものである」という考え方に立って、古語の基本的意味を探り、意味の派生を考え、それらをふまえて内容を深く読みとる指導を展開した。この指導法は、単に古典語句・語彙の指導だけでなく、古典の読解指導にも有効であることが、実践を通して明らかになった。

古語の基本的意味と意味の派生を分析した事例を、「はしたなし」（形容詞）を取り上げて示すと、次の図のようである。



基本的意味や意味の派生をとらえることは、生徒たちにはなかなかむずかしいので、教師が主要な形容詞・形容動詞の分析例を示したテキストを作成する必要がある。

「夕顔」の巻の中から、次の本文を取り上げて、基本的意味をふまえて内容を深く読みとる指導の一端を紹介したい。

「…(夕顔は)細やかにたをたとして、ものうち言ひたるけはひ、あな心苦しと、(源氏には)たたいとらうたく見ゆ。」 (源氏物語・夕顔)

「心苦し」は、基本的意味が「心が苦しい」の意で、夕顔の体つきが細やかでなよなよとしていて、物言いも弱々しく頼りないようすであるのを見て、源氏は「心が苦しくな」ったのである。「自分が

この女を何とかしなければと、胸がきゅっと締めつけられる思いを抱いた」というのである。「らうたく」は、「勞^{ちゆう}甚^{いん}し」の略で、基本的意味は「(心の)苦勞がはなはだしい」の意。源氏はこの女のそばにいと、自分がこの女を支えてやらねばこの女は生きていけないのではないかと思われるほど、夕顔がかわいく思われて仕方がないというのである。授業では、生徒と一緒に検討して、源氏の心情をあれこれ想像して、訳せば、「かばってやりたいと思わせるほどかわいい」くらいが妥当であろうということになった。

この実践は広島県教育課程研究会で発表した。私の公的な場における初の研究発表である。詳しくは、拙著『源氏物語』学習指導の探究』(溪水社・平成元年7月)を参照されたい。

昭和四四年四月から、生徒たちと対話する必要性を強く感じた私は、国語科授業の中で、毎時間、生徒に順番を決めて、「学習記録」(授業の概要・授業の疑問点・授業に対する要望・授業内容に対する感想を書く)を書かせるようにした。そして、毎時間、授業の初めに、授業内容に関する生徒の感想を紹介して、それを生かした学習を展開した。「学習記録」を生かした授業は、私が高校の場を離れる昭和五九年三月まで、一六年間続けた。現在、「現代国語」と「古典」の「学習記録」が五四冊残っている。

また、昭和四四年六月には、月例研究会「二七会」(野地潤家先生のご指導による研究発表と夏目漱石作品の輪読会)に入会する。

「高校紛争」で生徒たちが提起した課題に応えるためには、私自身の国語教育に関する研修・研究が不可欠だと考えて、この研究会に入れていただいたのである。この研究会で、国語科教育への目を開かれる。昭和五九年三月まで、毎月、かささず出席した。私にとって、二七会は国語教育研究の大学院であった。

以上、第二期の四年間は、「A君退学事件」や「高校紛争」などを体験する中で、生徒たちが少しでも意欲的に学習に取り組む国語科授業・古典授業を実現したいという思いを抱いて、「二七会」への入会、「学習記録」の導入、基本的意味や意味の派生に着目した古典語句・語彙指導と読解指導の試み、初めての「古典の教材化と単元編成」など、さまざまな試みを展開した時期である。

四、第三期(展開期)の古典教育実践の展開

さまざまな古典指導の試みを行ったり、月例研究会「二七会」で研修を重ねたりする中で、訓詁注釈的な古典授業を乗りこえて、古典文学を文学として読み味わわせるためには、たとえ週二時間の古典(古文)の授業であっても、生徒の興味・関心や問題意識をふまえた「学習テーマ」を設定して、ある程度まとまった分量の古典教材を読ませることが不可欠である、という考えを持つに至った。

このような古典指導を実現するための実践上の課題は何かを検討して、次の五つの課題を設定した。

- ① 生徒たちが興味・関心を持って、意欲的に古典学習に取り組みようにするには、どのような「学習テーマ」を設定すればよいか。
- ② 古典文学を文学として読ませるためには、ある程度まとまった分量の古典教材を読ませる必要がある。そのためには、どのような教材化と単元編成を図ればよいか。
- ③ それだけの分量の古典教材を限られた時間の中で読ませるためには、古典の持つ言語的な障害を乗り越えさせる必要がある。そのためには、どのようにテキストを作成すればよいか。
- ④ 生徒たちが意欲的に古典学習に取り組みようにするためには、どのような学習指導を展開すればよいか。
- ⑤ その学習指導を展開する過程で、古典の読解力を育てるためには、どのような学習の手引きを作成すればよいか。

この課題の解決をめざして、昭和四十七年二学期には、一年生を対象に、『平家物語』の学習指導―一の谷の合戦場面を中心に―の授業実践を行った。「平家物語」の中から「一の谷の合戦場面」を取り上げて、「戦乱の世の中を生きるさまざまな人間の生き方を探る」という学習テーマのもとに、次のような教材化と単元編成を図り、一三時間の授業を展開した。

- 第一章 二度之懸…河原兄弟・梶原景時親子
- 第二章 坂 落…源義経・佐原義連／武知清教・平盛俊
- 第三章 敦盛最期…熊谷次郎直実／平教盛
- 第四章 重衡生捕…平重衡・後藤兵衛盛長
- 第五章 知章最期…平知章・平知盛
- 第六章 落 足…落ちて行く平家の武士たち

テキストは、日本古典文学大系「平家物語」(岩波書店)の複写。学習の手引きとして、上段に「内容理解」のための問題、下段に「解釈」のための問題を作成した、次に挙げるようなプリントを配布した。

二、敦盛最期

〈内容理解のために〉

- ① 直実は、この場面の最初、
 どういう気持ちを抱いて磯の方へ馬を歩ませようとしたのか。
- ② 敦盛は、すでに馬に乗り海中を船に向かっていたのに、直実の招きにに応じてひき返したのなぜか。
- ③ 直実は、なぜ「いづくに刀をたつべしともおほえ」なかったのか。
- ④ 敦盛は、直実の要請にもかかわらず、なぜ名乗ろうとしなかったのか。
 (以下、略)

〈解釈のために〉

- ① 次の「む」「らむ」「じ」「まじ」「べし」の意味・活用形を述べよ。
- ア. 1行目「たすけ船に乗りむと、汀の方へ落ち給らむ。」
- イ. 9行目「汀にう上ながらむとする」
- ウ. 15行目「なんぢにあふてはな乗るまじいぞ。」
- エ. 18行目「勝つべきいくさに負くること、よもあらじ。」
- オ. 24行目「後の御孝養をこそ仕う候はめ。」
 (以下、略)

この「学習の手引き」は、内容理解のための問題と解釈のための問題が分離している「分離型の手引き」で、内容を読みとる過程に解釈の問題を位置づける作成の仕方にはまだ至っていないかった。

なお、「一の谷の合戦場面」は、石井進「平家物語の周辺―一の谷合戦河原兄弟討死の物語をめぐって―」(所収『古典の窓 第六号』角川書店、昭和39年3月)に触発されて実践したものである。これらの教材化と学習の手引きのもとに、次のような一三時間の

授業を展開した。

〔導入〕	平家物語の「一の谷の合戦場面」までのあらすじとこの合戦の源対時図をまとめたプリント資料を用いて説明(二時間)
第一章	二度之懸……同一教材による一斉学習(三時間)
第二章	坂落……同一教材による一斉学習(〇・五時間)
第三章	敦盛最期……自由選択教材によるグループ一斉学習(七・五時間)
第四章	重衡生捕……生徒一人ひとりが興味のある人物を選んで、その人物の登場する章ごとにグループを編成して、その人物像を浮き彫りにするとともに、その人物について感想をまとめて、全体の場で発表し、意見・感想を出し合う。
第五章	知章最期
第六章	落足……同一教材による一斉学習(〇・二時間)
〔まとめ〕	読後の課題(登場人物に対する手紙や短編物語を書く、詩歌をつくる)の発表(〇・八時間)

この單元では、同一教材による一斉学習と自由選択教材によるグループ学習を取り入れた、複線型の単元的展開による学習指導を行った。生徒が自分の選択した登場人物ごとにグループを編成して、その人物像と生き方に対する感想を発表する授業展開であったので、生徒たちは意欲的に学習に取り組んでくれた。

この実践は、昭和四七年一月に広島市で開催された広島県高等学校国語教育研究大会で発表した。詳しくは、呉三津田高校『研究紀要 第四号』(昭和48年3月)を参照されたい。

昭和四八年の二学期には、二年生を対象に、「方丈記」全文を取り上げて、「下級貴族と言える鴨長明が、混沌とした時代をどのよ

うにとらえ、どのように生きているかを探る」という学習テーマのもとに、一・二時間の授業を展開した。

昭和四九年の二学期には、三年生(文型クラス)を対象に、『源氏物語』の学習指導―明石上の物語を中心に―の実践を行った。「明石上」という受領階級に属する女性がどのように生きたかを探る」という学習テーマのもとに、次のような章立ての教材化と単元編成を図って、一六時間の授業を展開した。

第一章	源氏と結婚(明石)
第二章	源氏との別れ(明石)
第三章	明石上の上京(松風)
第四章	明石姫君を養女に(薄雲)
第五章	明石入道の入山(若菜上)

テキストは、岩波日本古典文学大系「源氏物語」と小学館日本古典文学全集「源氏物語」を複写した。学習の手引きとして、次頁のようなプリントを配布した。

この「学習の手引き」は、上段に、「源氏物語」を読みとり、読み味わう問題が授業展開順に配列してある。上段③に見られるように、問題は、大きな内容を問う問題の下に、それを解決するための小さな問題を位置づけ、その中に内容を理解するために必要な文法の問題も含めてある。小さな問題を解決していけば、自然に、大きな問題が解決できるように、また、その過程で、問題を解決するための着眼点や手順・方法をも自然に身に付けることができるように

第一章 源氏との結婚

〔前段〕(資料)一ページ初め～二ページ3行目

- (1) 時・場所・登場人物を明らかにして、この段のあらすじをノートにとめよ。
- (2) 季節は秋である。秋という季節の設定がどのような効果をおいているか。
- (3) 源氏は、明石上に対してどのような扱い方をしているか。
- (4) ①「あたり給はむことをば、あるまじう思したる」(一・4行目)とあるが、「まじう」(まじ)の解釈を検討し、この部分には源氏のどんな思いが読みとれるか。
- ② 当時の結婚制度は男性が女性を尋ねる形であったことを考え合わせると、結局、源氏は明石上をどのような女性として扱おうとしているのか。
- ③ 明石上は、源氏に対してどのような態度をとっているか。それはなぜか。(以下、略)

〔次の傍線部の解釈をせよ。〕

- ① 一頁7行目「我は、いみじき物思ひをやせむ。」
- ② 一頁8行目「よごもりて過ぐす年月こそ、あいな頼みに、行くへ心にくう思ふらめ、なかなかなる心をや尽くさむ。」
- ③ 一頁14行目「あけくれの御有様おぼつかからで、」
- ④ 一頁17行目「ここの年頃の祈りの、かなふべきを思ひながら、ゆくりかに見せたてまつりて、「おほしかずまへざらむ時、いかなる嘆きをやせん」と思ひやるに、ゆゆしくて、…」
- ⑤ 二頁2行目「御直衣たてまつり、引きつくりひて：」(以下、略)

工夫してある。まだ内容と解釈の問題が分離された「学習の手引き」ではあるが、昭和四七年度における「平家物語」の実践の反省に立つて、授業展開に役立つように内容の手引きは工夫したものである。

なお、下段には、この単元で重点的に習得させたいと考えた推量の助動詞や敬語の問題が位置づけてある。

この単元の学習指導は、次のように展開した。

- (1) 導入 柴式部と「源氏物語」、明石上を取り上げた理由と学習テーマ、「明石」巻までに歩んだ源氏の人生、明石上一家の紹介(一・五時間)
- (2) 第一章 源氏と結婚(明石)：一斉学習(四時間)
 - ・結婚前後の源氏、明石上、明石入道、尼君の心情を読みとらせる。
 - ・教師の作成した「学習の手引き」を活用して、内容を読みとらせるとともに、読みの方法も学ばせる。
- (3) 第二章 源氏との別れ(明石)：一斉学習(〇・五時間)
 - ・別れの場面の源氏、明石上、明石入道、尼君の心情を読みとらせる。
- (4) 第三章 明石の上の上京(松風)：グループ学習・一斉学習(六時間)・明石上・明石入道・尼君の中から興味のある人物を選んでグループを編成し、その人物の心情と人物像をまとめて、全体で発表し、意見や感想を出し合う。
- (5) 第四章 明石姫君を養女に(薄雲)：一斉学習(三時間)
 - ・明石姫君を養女に出す場面の明石上と尼君の心情を読みとらせる。
- (6) 第五章 明石入道の入山(若菜上)：一斉学習(〇・八時間)
 - ・明石入道、明石上の心情を読みとらせる。
- (7) まとめ 読後感想、登場人物に手紙を書く、短編小説を書く、登場人物の立場に立つて詩歌を創る課題を出した。(〇・二時間)

この実践は、昭和四九年一月、山口県立光高校で開催された第九回中国地区国語教育研究会高校部会で発表した。詳しくは、前掲書『「源氏物語」学習指導の探究』を参照されたい。なお、この実践は、今井源衛「明石の上について」(『源氏物語の研究』未來社、昭和37年7月)に触発されて行ったものである。

昭和五〇年の二学期には、昭和四七年度とほぼ同じ『平家物語』の学習指導―一の谷の合戦場面を中心に―の教材化と単元編成のもとに、一六時間の授業を行った。

以上、第三期は、一年に一回（二学期）ではあるが、生徒の興味・関心や問題意識をふまえた「学習テーマ」を設定し、そのテーマのもとに、ある程度まとまった分量の古典教材を取り上げた教材化と単元編成を図って、学習指導を展開することができるようになった。この古典指導法が、古典文学を文学として読み味わわせる過程で古典読解力を育成するためには有効であることも、実践を通して明らかにすることができた。しかし、「学習の手引き」や「単元（授業）の展開」には多くの課題を残した。

五、第四期（発展期）の古典教育実践の展開

昭和五一年四月、新設二年目の安古市高校に転勤する。すべての教師が、新しい学校を創ろうとする意欲に燃えている。時間割の中に教科研修の時間が組み込まれている学校であった。国語科は、県教育委員会の研究指定を受けて、三年間、「生徒個々に応じた国語科授業の開発」というテーマで共同研究に取り組む。また、昭和五一年度は、国語科（五名）の共同研究として、「古典Ⅱ」教科書（源氏物語「徒然草」「奥の細道」「枕草子」「万葉集・古今集・新古今集」）の教材化の実態について調べる。考察の結果は、『安古市高

等学校研究紀要 第二号』（昭和52年3月）に掲載されている。

この第四期は、実践経験も一四年目（36歳）〜一七年目（38歳）を迎え、学期に一回は、教科書教材を中心にしながらも、それを生かした古典の教材化と単元編成を図って、古典指導を展開することができるようになっていった。

昭和五一年度には、一年生を対象に、毎週二時間、教科書『高等学校古文一改訂版』（角川書店）を用いながら、次のように古典指導を展開した。

- ① 古文入門Ⅱ教科書教材「今昔物語」三編を読む。（12時間）
 - ② 文法Ⅱ「動詞の活用・時の助動詞のまとめ」（4時間）
 - ③ 古今集を読むⅡ教科書教材八首と補充した歌を読む。（3時間）
 - ④ 文法Ⅱ「形容詞・形容動詞の活用のまとめ」（1時間）
 - ⑤ 「伊勢物語」を読むⅡ「さまざまな愛の姿を見つめて」という学習テーマのもとに、次のような古典の教材化と単元編成を図り、一六時間の授業を展開した。
- (1) 異性間における愛
 - ① 初恋Ⅱ第一段「初冠」
 - ② 片思いⅡ第四五段「螢」
 - ③ 相思相愛Ⅱ第六段「芥川」
 - ④ 三角関係Ⅱ第三段「筒井筒」・第二四段「梓弓」
 - (2) 肉親間における愛Ⅱ第四一段「女はらから」
 - (3) 主従間における愛Ⅱ第八二段「交野の桜」・第八三段「小野の雪」

教科書は段数順に配列されているが、私はさまざまな愛の姿とに教材化した。授業では、各段の読みとりに終わらないで、それぞれの段の愛に姿に対する生徒の感想を発表させるように配慮した。

第二四段の授業では、疑問の書き込み方を手引きしたプリントを配布し、疑問を持ちながら本文を読むことができるように仕向けた。生徒の疑問の中でも、特に、男が宮仕えに出かけて、三年間帰って来ない間、女がどのような思いを抱きながらいたのか、また、男はどのような思いを抱きながら宮仕えをしていたのかを想像したことを短編小説風にまとめて発表させた。

詳しくは、広島県高等学校教育研究会国語部会誌『年報30号』（昭和54年10月）を参照されたい。

⑤ 文法Ⅱ「簡単な敬語のまとめ」（1時間）

⑥ 「平家物語」を読むⅡ「一の谷の合戦の場」を取り上げて、「戦

I. 戦場において生きる男の姿

第一章 二度之懸…河原兄弟・梶原景時親子

第二章 坂 落…源義経・佐原義連／武知清教・平盛俊

第三章 敦盛最期…熊谷次郎直実／平敦盛

第四章 忠度最期…平忠度・岡辺六野太忠純

第五章 重衡生捕…平重衡・後藤兵衛盛長

第六章 知章最期…平知章・平知盛

第七章 落 足…落ちて行く平家の武士たち

II. 戦乱の世の中を生きる女の姿

第八章 小宰相身投…小宰相・乳母の女房

乱の中を生きるさまざまな人間の生き方を探る」という学習テーマのもとに、次のような教材化と単元編成を図り、一七時間の授業を展開した。

教科書は、「鹿の谷」「忠度の都落ち」「逆槽」「能登殿の最期」を取り上げて、「平家物語」の全体像をとらえさせようとした教材化（タテの教材化）と考えられるが、この四教材でそれをねらうのには無理がある。私は「一の谷の合戦の場」に焦点を絞って、同じ場面においてさまざまな人物がどのような生き方をしているかを読み比べさせる教材化（ヨコの教材化）を図った。昭和四七年度の実践の反省に立って、「忠度最期」を加えて、戦場を生きる多様な武士の生き方を浮き彫りにするようにした。また、「小宰相身投」を取り上げて、戦乱の世の中を生きる女の生き方も教材化して、当時の時代状況の中を生きる人間群像を、これまでよりも幅広くとらえさせようとしたものである。

テキストは、プリント一八枚。第一章「二度之懸」、第二章「坂落」、第三章「敦盛最期」は、次頁に挙げるような「傍注資料」を作成、それ以外は日本古典文学全集『平家物語二』（小学館）を複写した。傍注資料の作り方は、次のとおりである。

本文の右側には、一行目にく印をつけて補充すべき語句をカタカナで書き、二行目には本文の傍線を施した部分に対応する現代語訳をつけた。この例にはないが、三行目に難語句の解説を「」の中

《①同一教材による一斉学習》②自由選択教材によるグループ学習》③一斉学習」という単元の展開の仕方は、昭和四七年度の実践と同じである。①の授業で、人物像のとらえ方を学習させて、それを②の授業で応用させるといふ展開の仕方をとったものである。

この実践は、『平家物語』の学習指導―『一の谷の合戦の場』を取り上げて―（広島大学教育学部国語教育学会で発表し、同学会誌『国語教育研究 第24号』（昭和52年3月）に掲載されている。

⑦ 文法Ⅱ「助動詞と敬語のまとめ」（二時間）

⑧「徒然草」を読むⅡ単元「兼好の無常観―『つれづれ』と自然に対する見方―」という学習テーマのもとに。序段「つれづれなるままに」・第七五段「つれづれわぶる人は」、第七四段「蟻のごとくに集まりて」、第一三七段「花は盛りに」を取り上げて教材化と単元編成を図り、八時間の授業を展開した

⑨ 文法Ⅱ「助詞のまとめ」（二時間）

昭和五二年度には、二年生を対象に、次のような学習指導を展開した。

①「万葉集」を読むⅡ「万葉人の心を探る」という学習テーマのもとに、有間皇子、額田王・大海人皇子、大津皇子・大御皇女・石川郎女、柿本人麻呂、高市黒人、山部赤人、大伴旅人、山上憶良、大伴家持、東歌・防人（全六一首）を取り上げて、時代背景や歴史的背景もふまえて、万葉人の心を探る教材化と単元編成を図って、

授業を展開した。

② 文法Ⅱ「助動詞の意味による分類と推量の助動詞の整理」
③「土佐日記」を読むⅡ教科書教材（門出・「照る月」・「黒鳥」・「忘れ貝」・「帰京」）を読む。

④「枕草子」を読むⅡ「清少納言のものの見方・感じ方・考え方を探る」という学習テーマのもとに、次頁の図のような教材化と単元編成を図り、一七時間の授業を展開した。

I 同一教材による一斉学習（授業の中で）

- (1) 自然観照：作者の自然観をちらえさせる。
 - ① 総括的にⅡ第1段「春はあけぼの」
 - ② 夏Ⅱ第三三三三三三「五月ばかりなどに山里にありく」
 - ③ 秋Ⅱ第一三〇段「九月ばかり、夜一夜」・第二三三二二二「月のいとあかきに」
 - ④ 冬Ⅱ第一八一段「雪のいと高うはあらず」
 - (2) ものづくし：作者のさまざまな「もの」に対する見方。感じ方をとらえさせる。
 - ① 客観的に存在する「もの」：第四三段「虫は」
 - ② 主観的に存在する「もの」：第四二段「あてなるもの」
第七五段「ありがたきもの」
 - (3) 宮廷生活：自伝的な部分を読んで、作者のものの見方・感じ方をとらえさせる。
 - ① 第一二九段「関白殿、黒戸より」、② 第一三七段「五月ばかり、月もなう」、③ 第二九九段「雪のいと高う降りたるを」
 - (4) 人生評論：作者の人生に対する考えの一端をとらえさせる。
 - ① 第二六九段「よろづのことよりも情けあるこそ」
- 自由選択教材による個別学習（授業の外で）
主観的に存在する「ものづくし」全75段

「枕草子」の全体像をとらえさせるために、田中重太郎の「枕草子」四分類説に従って教材化と単元編成を図ったものである。

「ものづくし」の個別学習は、次のように展開した。

I 同教材による「斉学習（練習学習）」（授業内で）

第42段「あてなるもの」・第75段「ありがたきもの」を取り上げて、次のような授業を行った。

- ① 題目の意味を明らかにする。（↓辞書）
- ② 同じ題目で思いつくことを列挙する。
- ③ （ここではじめて）「枕草子」の本文を読む。
- ④ 清少納言の書いた内容と各自が思いついた内容とを比較して、その共通点と相違点を明らかにする。
- ⑤ 感想を発表する。

II 自由選択教材による個別学習（応用学習）（授業外で）

- (1) 第一段階（自分の興味・関心のある段を選び、書く作業）
 - ① 題目の意味：全75段の題目の意味を辞書で調べて書く。
 - ② 自由選択：全75段の中から自分の興味・関心のある段をつ選ぶ。その段を選んだ理由を書く。
 - ③ 同じ題目で、自分の思いついたことを書く。
 - ④ 第二段階（読む作業）（はじめて、本文を読む）
 - ⑤ 自分の選んだ段の本文をノートに筆写する。
 - ⑥ 辞書・文法書などを利用して現代語訳する。
 - ⑦ 内容を分析して、いくつ、どんなことが列挙されているかを整理する。
- (2) 第三段階（書く作業）
 - ① 自分の思いついたものと作者の書いているものを比較する。
 - ② 共通点と相違点を明らかにする。
 - ③ 《感想の書き方の手引き》↓第一次感想文を書く。
 - ④ 第二次感想文を読んで、個別に助言メモを渡す。面談する。
 - ⑤ 第二次感想文を書く。
 - ⑥ 第二次感想文を読んで、個別に面談する。
 - ⑦ 第三次感想文を書く。
- (4) 提出する。（↓文集にして回覧する。）

この実践は、県教育委員会指定の研究テーマ「生徒個々に応じた国語科授業の開発」にもとづいて取り組んだものである。生徒と古典（枕草子）との出会いを演出しているところに、この授業の特色がある。まず、同じ題で生徒の思いつくことを書かせて、その後で初めて「枕草子」の本文と出会わせる。生徒は、同じ題で清少納言はどんなことを書いているか、ワクワクした気持ちを抱いて、「枕草子」の本文と出会う。そして、自分の思いついたものと清少納言の書いてあるものとを比較することを通して、いつの時代でも変わらぬものと時代によって異なるものとを発見して、古典を読む楽しさや面白さを感じることができるといえる。そういう出会いの演出をした。

この個々の生徒に即応した古典指導の試みは多くの収穫があり、国語科授業の中でも実践してみたいという思いを強く抱かされた。

なお、この実践は、「『枕草子』の学習指導―個々の生徒に即応した学習指導法を求めて―」（『安古市高等学校』『研究紀要 第三号』昭和53年3月）に報告している。

⑤ 「大鏡」を読む⇨教科書教材「弓争い」だけを読む。

⑥ 「方丈記」「新古今集」を読む⇨平安末期から鎌倉初期の混乱した時代を没落していく貴族は、どのようなことを考えながら、どのように生きていたかを探る」という学習テーマのもとに、次のような授業を展開していった。

《「方丈記」を読む》：「下級貴族と言える鴨長明が、混沌とした

時代をどのようにとらえ、どのように生きているか」という観点から、「方丈記」全文をプリントして配布し、軽重はつけながらも全文を通して読む。そのときに、次の新古今集への学習へつなげるも考えて、藤原定家の「名月記」（書き下し文）の内容と比べながら一たとえば、福原遷都ならば、その遷都のときに長明と定家はそれぞれどのような反応や生き方をしていたかを比較しながら読んでいった。

《「新古今集」を読む》：「武士が台頭し、政治の中枢から没落する貴族が、その時代にどのように対し、どのように生きているか」という観点から、藤原定家を中心に、後鳥羽上皇・寂蓮法師・藤原俊成・西行法師・式子内親王・俊成卿女・藤原良経の歌を読む。高木市之助編『岩波小辞典 日本文学 古典』（岩波書店・昭和三〇年九月）の「新古今調」の解説を参考にして授業を展開した。

昭和五三年度には、三年生（文系）を対象に、「古典Ⅱ」（古文・週三時間配当）の授業として、次に挙げるような学習指導を展開した。なお、学習指導要領「古典Ⅱ」は、「一つまたはいくつかのまとまった作品を精読することを通して、その作品の特質やその作者の特質が解るようにすること」がめざされている。私は、古典作品として「源氏物語」と「奥の細道」を取り上げたが、「源氏物語」を中心に置いて、「源氏物語」の特質が理解されるようにと考えて、教材化と単元を編成して実践した。

①「源氏物語」を読むⅡ「受領層に属する明石の上と浮舟が、その身分ゆえに、どのような人生をたどらねばならなかったかを探る」という学習テーマのもとに、「明石の上物語」と「浮舟物語」の教材化と単元編成を図り、六五時間の授業を展開した。

導入 紫式部と「源氏物語」、学習テーマと全体の授業構想

第一部 明石の上物語

第一章 光源氏の誕生（桐壺）

（導入）明石の一家の紹介（系図・入道父子の結婚観）

第二章 光源氏との結婚（明石）

第三章 光源氏との別離（明石）

第四章 明石の上の土京（松風）

第五章 明石の姫君、紫の上の養女に（薄雲）

※第六章 明石の姫君入内（藤裏葉）

※第七章 明石の入道入山（若菜上）

第二部 浮舟物語

（導入）浮舟という人物の紹介（系図・浮舟の半生）

第一章 浮舟の生い立ち（宿木）

第二章 左近の少将の婚約破棄（東屋）

第三章 薫、浮舟を守治に（東屋）

第四章 匂宮、浮舟を橘の小島に（浮舟）

第五章 浮舟、入水を決意（浮舟）

※第六章 浮舟の出家（手習）

まとめ 読後感想文とレポートを書かせる。

「源氏物語」の教材化には、整理すると、次のような類型がある。

I. いわゆる三部構成説に立って、主題・構想に迫る教材化

A. 縦の並びに焦点をあてた教材化

B. 縦の並びに、横の並びを合わせた教材化

Ⅱ. 源氏物語の全体像を理解させるという立場に立って、有名な箇所を取り上げた教材化

Ⅲ. ある特定の登場人物を取り上げて、その人物の生き方や人物像を鮮明にとらえさせる教材化

昭和四十九年度の実践と同じ第Ⅲ類型の立場に立って、「明石の上物語」に新たに「浮舟物語」を加えて、受領層に属する二人の女性がその身分ゆえにどのような生き方をしなねばならなかったのか、さらには、同じ受領層に属する紫式部はどのような思いを二人の人物に託しているのかを探ることをねらって、前頁下段の表のような教材化と単元編成を図ったものである。

テキストは、日本古典文学大系『源氏物語』（岩波書店）を複写した。プリント、三二枚。ただし、上段表の※印を付した三つの章は、繰り返し朗読することによって内容を自然に把握させるために、昭和五一年度「平家物語」の実践で開発した「傍注資料」を作成した。この資料を教師や生徒がゆっくりと音読する過程で、聞き手は本文の両側にある傍注を読んで、大体的内容を把握するという授業を想定して作成してある。

参考資料は、全体の導入として「紫式部と『源氏物語』」（筑摩書房・古典Ⅱ教科書解説）、「源氏物語五十四帖の紹介」、第一部の導入資料として「明石の上一家の紹介」、第二部の導入資料として「浮舟という人物の紹介」などを作成した。

「学習の手引き」は、昭和五一年度「平家物語」実践における手

引きの仕方を発展させて、内容を読みとり、読み味わう過程で、必要に応じて、語句や文法を押さええる授業を展開することができるように、問題を重層構造化して作成してある。

第Ⅰ部第二章「光源氏との結婚」の手引きは、次のとおりである。

《第二章 光源氏との結婚》（明石）

第二章までのあらすじ紹介（省略）

《学習の手引き》

明石の上と光源氏が、どのような思い、どのような経緯の中で結婚に至るかを明らかにしよう。

第二章は大きく次のように三段に分けることができる。

第一段（初め～3ペ23行）……結婚前

第二段（3ペ23行～4ペ31行）……結婚の日

第三段（4ペ32行～終わり）……結婚後

各段ごとの内容を深く読みとっていく。

▽第一段 結婚前

(1) 所は明石の浦、時は秋。秋という季節の設定をどのような意図でしたと考えられるか。

①「例の、秋は、浜風の異なるに、ひとり寝も、まめやかに物わびしうて、入道にも、折々かたらせ給ふ。」（3ペ1・2行）から考えられることを一つあげよ。

②紫の上が初めて登場し光源氏にのぞき見されたのはうらかな春であったのに、明石の上の場合には秋である。これには何か意図があるのだろうか、想像してみよ。

(2) 光源氏は、明石の上という人物に対して、どのような扱い方をしているか。

①「わたし給はむことをば、あるまじう思したる」（3ペ4行）とあるが、「まじう」（まじ）の用法を検討し、この部分には光源氏のどのような考えが読みとれるか。」

②当時の結婚制度は男性が女性の所を尋ねる形であったことを考え合わせると、結局、光源氏は明石の上をどのような女性として扱おうとしているのか。

(3) この光源氏に対して、明石の上はどのような態度をとっているか。また、それはどうしてか。

①明石の上は、光源氏の「こち参らせよ。」(3べ3行)という申し出に対して、どのような態度をとっているか。

※「さらにおもひ立つべくもあらず」(3べ5行)に注意。

②明石の上は、なぜそのような態度をとるのか。

※「人数にも思されざらむものゆゑ」(3べ6行)とあるが、誰が、誰に、どのように思われるというのか。

※「我はいみじきもの思ひや添へむ」(3べ6行)に注意。(以下、略)

これらのテキスト、参考資料、学習の手引きを用いて、毎週三時間、ほぼ二学期かけて、六五時間の学習指導を展開した。

同じ作品を長期間にわたって読んでいくことになるので、生徒の学習意欲を持続させるために、①導入段階で、全体の授業構想や学習計画を明示するとともに、各章、各時間の初めに、学習の目標や学習の仕方(学習課題)を明示して、常に生徒に、何のために、何を、どのように学習するのかを意識させるようにする、②教材の扱い方も、じっくり時間をかけて読む教材と、「傍注資料」を用いて朗読を中心にしてあまり時間をかけないで読む教材というように変化をつける、③学習形態も、一斉学習、生徒一人ひとりが選んだ登場人物ごとにグループを編成したグループ学習、レポートをまとめる個別学習と変化をつける、などの工夫をした。

導入 紫式部と「源氏物語」学習テーマと全体の授業構想(一斉学習・3時間)
第一部 明石の上物語

第一章 光源氏の誕生(桐壺) (一斉学習・5時間)

(導入) 明石の一家の紹介(系図・入道父子の結婚観) (一斉学習・2時間)

第二章 光源氏との結婚(明石) (一斉学習・6時間)

第三章 光源氏との別離(明石) (一斉学習・2時間)

第四章 明石の上の上京(松風) (グループ学習・一斉学習・9時間)

第五章 明石の姫君、紫の上の養女に(薄雲) (一斉学習・6時間)

第六章 明石の姫君入内(藤裏葉) (朗読中心学習・2時間)

第七章 明石の入道入山(若菜上) (朗読中心学習・25時間)

(まとめ) (一斉学習・05時間)

第二部 浮舟物語 (一斉学習・1時間)

(導入) 浮舟という人物の紹介(系図・浮舟の半生) (一斉学習・1時間)

第一章 浮舟の生い立ち(宿木) (一斉学習・15時間)

第二章 左近の少将の婚約破棄(東屋) (一斉学習・15時間)

第三章 薫、浮舟を宇治に(東屋) (グループ学習・一斉学習・9時間)

第四章 匂宮、浮舟を橘の小島に(浮舟) (一斉学習・5時間)

第五章 浮舟、入水を決意(浮舟) (朗読中心学習・2時間)

第六章 浮舟の出家(手習) (朗読中心学習・2時間)

(まとめ) 読後感想文とレポートを書く。(一斉・個別学習・2時間)

(注)「明石の上物語」は明石の入道の謎が次第に解きあかされる物語の展開になつていので、全教材を学習させた後でその人物像をたえさせる授業展開を図った。「浮舟物語」は物語の筋の展開が複雑なので、導入段階で浮舟の半生を紹介しておいて物語を読んでもよく授業展開を図った。

この「源氏物語」の学習指導は、生徒にとつては、これまでの二一年間に培ってきた古典学習の総仕上げであるが、私にとつては、これまで一五年間にわたって積み上げてきた古典指導の集大成であり、かつ、到達点であった。この実践は、全国高等学校国語教育連

合会広島大会で発表した。また、翌年八月には、日本国語教育学会（全国大会）高校部会でも発表した。詳しくは、前掲書『源氏物語』学習指導の探究』を参照いただきたい。

②「奥の細道」を読むⅡ「旅立ち」「白河の関」「松島」「平泉」を
大学入試も意識して問題演習の授業を展開する。

以上、第四期は、長年の実践研究の蓄積の上に、学習者の興味・関心や問題意識をふまえた「学習テーマ」を設定し、そのテーマのもとに、かなりの分量の古典の教材化と単元編成を図って、課題解決型の単元的展開による古典指導を実践することができるようになった時期である。昭和五一年度の「平家物語」の実践から、「傍注資料」を活用し、課題重層型の学習手引きを用いて、内容を深く読みとる過程で、語句の意味や文法を押さえる授業を展開する指導法を開発した。学習指導過程も、同一教材による一斉学習↓自由選択教材による個別学習（グループ学習）↓一斉学習という展開のもとに、読む・書く・話す・聞く言語活動を有機的、総合的に位置づけて、古典読解力を中心に、話す力・聞く力・書く力を育てる実践がある程度できるようになった。これらの実践は、戦後古典教育実践史を振り返ってみても、私が初めて開拓した古典教育の領野ではないかと思う。

六、第五期（深化期）の古典教育実践の展開

昭和五四年四月、広島大学附属中・高校に転出する。五年間、個人の古典教育の実践研究とは別に、国語科教員（八名）が協同して、月例の国語科授業研究と新学習指導要領を受けた「現代文と古典の総合化を図る」実践研究を行う。誌面の関係もあるので、その大体を述べることにする。

昭和五四年一月から始めた月例国語科授業研究会は、一時間の国語科授業をどのように展開するかを研究テーマに、事前の学習指導案の検討↓研究授業↓事後の授業研究という三段階をふむ、実に厳しい研究会であった。教材分析から構造化した板書計画と発問計画をどう立てるか、その計画にもとづいて、どのように授業を展開するかを徹底的に検討し合った。

この検討過程で、私は小山清氏の「古典の授業も現代文の授業と同じように、内容を読みとっていく過程で、語句の意味や文法の用法を問うべきである」という考え方と出会った。この考え方は、私の求めてきた「古典の内容を読むことに機能する語句や文法の指導を」という考え方とつながること、さらには大村はま先生の「仏様の指」の精神とも重なることを発見した。これがきっかけとなって、私の提唱する「目標の二重構造化論」が生まれたのである。生徒の学習目標は内容を読みとることにあり、教師の指導目標はそれとも別に国語学力を育てることにあり、生徒と教師の目標を区別して授業を構想する指導方法論である。「目標の二重構造化論」に

ついては、日本国語教育学会誌『月刊国語教育研究』（平成3年4月）や前掲書『源氏物語「学習指導の探究」』などを参照されたい。

「国語Ⅰ・Ⅱ」における「現代文と古典の総合化」を図る実践研究は、新学習指導要領の実施前に、全国に先駆けて取り組んだものである。この実践研究は全国的にも高く評価されて、「広大附属方式の総合化」と呼ばれるようになった。詳しくは、広島大学附属中・高校国語科編『国語科研究紀要』（第11、15号）を参照されたい。

個人の古典教育実践としては、まず、昭和五四年二学期に一年生を対象にした「平家物語」の実践を挙げたい。基本的には、昭和五一年度の実践と同じであるが、「忠度最期」と差し替えて「越中前司最期」を教材化した点や、生徒自身が作成した「傍注資料」をテキストにして、群読発表会を行った点が新しい試みである。詳しくは、全国大学国語教育学会誌『国語科教育』第29集（昭和57年3月）を参照されたい。

次に、「源氏物語」の実践を挙げると、いずれも三年生を対象に、昭和五四年度には、三省堂の教科書を生かして、光源氏と紫の上明石の上を取り上げて教材化し、三七時間の授業を展開した。昭和五五・五六年度には、「宇治十帖物語」を取り上げて教材化し、物語の筋を追いながらも、登場人物の生き方を浮き彫りにする、三七時間の授業を行った。昭和五八年度には、宇治十帖物語の学習で生徒たちが疑問を抱いた〈宇治の大君と薫の関係〉に絞って教材化し、

三五時間の授業を展開した。これらの実践はいずれも、前掲書『源氏物語「学習指導の探究」』に掲載してあるので参照されたい。

以上、この第五期は、生徒が意欲的に国語学習に取り組む過程で国語学力を育てる指導方法原理として、「目標の二重構化論」を見出したことや、協同研究ではあるが、「現代文と古典の総合化」を図る古典指導の新たな世界を開拓したこと、「源氏物語」の学習指導においても新たに「宇治十帖物語」の授業を展開したことなど、私自身の古典教育実践の深化を図ることのできた五年間であった。

おわりに

このような二十一年間の実践研究を通して、六頁上段に掲げた五項目の実践課題は、不十分な点は残しながらも、基本的な点においては解決できたのではないかと思う。

こうして古典教育実践個体史を跡づけてみると、いかに私がよき師、よき仲間、よき生徒に恵まれていたのかを切に感じる。感謝の思いで一杯である。また、このたび、思いがけなくも、特別講演の機会をお与えいただいたことに對してもあつくお礼を申し上げます。（なお、講演内容を一部修正した点があることをお断りしておきたい。）